

ろと記憶している。

二カ月の収容所生活を経て、故国日本の浦賀に入港、懐かしの故郷三ヶ日村に帰つたのは二十年十二月二日だった。

長い人生のなかではわずか二年八カ月ではあるが、心の中では最大のウエートを占めている出来事であった。多数の戦友が戦死した中で幸運にも生還した自分は、戦争の悲惨、非情、愚かしさを子孫に伝えることが我々の責務だと思ふ。そしていかなることがあつても、再びあのようなことがあつてはならぬと声を大にして叫ぶものである。それが英霊に対する供養だと思ふ。

ミンダナオの餓死行

愛知県 松井 駿 平

昭和十九年六月、ミンダナオ島北西部海岸のカガヤンに上陸した第二百二十五野戦飛行場設営隊は、十月二

十二日敵の大空襲を受け、続いて二十四日レイテ島に敵上陸の報により飛行場設営を中止し、奥地に移動することになった。

二十年四月、南部コタバトにも敵が上陸北進するに至り、部隊は中央山地のマナゴックからさらに東海岸を目指して地図にもつていない山中を東進することになり、物資搬送は専ら人力に頼る苦難の行進が始まった。総員二百二十二人の小部隊は、わずか八十挺の小銃しか持たず、連日、敵機の哨戒下の行軍だった。

五月末突然、戦備下令があり、行軍の速度が早くなり、取り残される糧秣その他の物資が多くなってきた。敵機は相変わらず飛び廻り、一山隔てた日本軍を爆撃している。包囲全滅を恐れた司令官は離脱するために予定を変更して独自の行動を取ることにになり、十日分の食糧を持って東に向かつて急進を命じた。何故、敵を迎えて戦わないのか、全力を振るって花と散れと、意見具申したが容れられなかった。

苦心して運んだ食糧も薬品も大部分を置き去りにして、わずか靴下に三本位の米を持ち、当てもない先の

現地調達を空頼みして何百キロもの行軍が開始された。地図にも書いてない密林の山中だから適当に日本の地名をつけて目印にした。一週間たつとポツポツ落後者が出てくる。ピタミン注射を続けた。

密林を切り開きながらの前進だから、一日の行程は僅かであり宿泊は望めない。野菜は無いから草の葉が代用である。栄養失調で歩けぬ者が相次ぎ、乏しい食糧と薬を少し与えて「あとで迎えにくるから」と残して進む。一カ月目には元気な者はわずかになり、唯一の頼みの芋畑も先行部隊の喰い荒した跡ばかりで、このままでは全員餓死の危機が迫った。遂に前進をあきらめ今来た道を逆戻りすることになったが、既に食物の尽きたこの帰りこそ正に死の行軍である。残れば死は明らかである。誰もが死に物狂いで歩いた。

元気な者はほとんどん先に行き、患者と私は次第に取り残されていった。数日前に来た路を戻る。屍臭がひどい。哀れ残った者の死骸に蛆が湧いて目、鼻、口と動き廻っている。正に鬼気迫る。坂の途中に寝たまま息絶えている者もある。手を合わせ冥福を祈った。七

月三日「三里原」に帰り着いた。

ここは六月二十一日から二十四日までのところで、前進か後退か迷ったところだ。帰り着いたが食物が無い。元気なもの十名が敵中になっているだろうがマナゴックまで糧秣集めに出発した。芋畑探しにでていた斥候が芋畑を発見して帰ってきた。二日行程の地点だ。皆助かったぞと喜び、前進と決まったが、悲しいことに全く動けぬものが十数名いる。衛生兵一人残して出発。「芋畑からどしどし運ぶから待っておれよ」と副官が言い聞かせていた。

途中雨にうたれて夜を明かし、夕方近く待望の芋畑に着いた。斜面一面に青い葉が見える。唐黍もある。この光景は今でも覚えている。芋を掘り「三里原」に残した者の救出に向かったが屍臭が鼻をつく。転がっている白骨も増えている。何という悲惨な光景か、正に地獄である。

残していった患者は寝たきりでいたが、涙を流して喜んでくれた。ピタミン注射をして廻った。持つて来た芋と薬を分け与えたら押し頂いて喜んでくれた。お

そらくこのまま死んでいく彼等である。ここに置き去りにするに忍びないが運ぶ力は無い。元氣を出して頑張れよと一人一人の手を強く握りしめ、別れの挨拶をした。皆目に涙を浮かべて「軍医殿。お世話になりました。どうぞ体に氣をつけてください」といつてくれる。尽きせぬなごりを惜しんで別れたが、断腸の思いだった。

芋畑を「戸田原」と命名し、しばらく駐留した。途中離隊した者や後続の者も一部着いたが、ほとんどは遂に帰らなかった。途中道を誤ったものは餓死の道をとどめた。八月十七日ダグラス機がピラを撒いて飛び去った。

「ミンダナオ島の日本軍兵士に告ぐ、日本は降伏した。直ちに出てこい。宿舎も食物も充分やるぞ」というようなことが書いてあった。本当か宣伝か？まだ日本は負けるものか、本当なら命令があるはずだ。このまま頑張ろうということになった。

このころから皆の衰弱が目だってきた。芋もほとんど採れない。毎日わずかな芋の葉を食べる日が一週間

も続いた。ついに足元がふらつき、小石にも転ぶようになった。毎日、患者を見て廻ることも出来なくなつた。各方面に芋探しの斥候を出したが、何れも無駄骨だった。皆がっかりして帰ってきた。

次第に犠牲者が増す。「戸田原」も第二の地獄原になりそうだ。十日間に八名が死んだ。九月一日にマナゴックに戻ることにした。山中で餓死するよりマナゴックに出て、一戦交えて華々しく死んだ方が良いと部隊長の決心を促したのである。兵も喜んだ。どうせ死ぬなら餓死より戦死をと。しかしここにも「三里原」と同じく動けぬ患者が十数人いる。彼等も諦めていた。「動けるようになったら追及しますから、先に行ってください」といつているが、内心覚悟を決めているのだらう。別れを告げて、ふらつく足を踏みしめ、杖を頼りに谷間の密林を行く。

降伏の命令を持った本多伍長にあった。ピラは本当だったのだ。内心ほっとした。しかし投降した後どうなるであろうか。「戸田原」を出て三日目に芋畑に出会った。三カ月前に通つたところだ。他隊のいた宿舎

に入った。

ここでは芋あり、味噌あり、醤油ありで、全員腹一杯に食べられた。五カ月前、山に入る準備をしたところ、汚れた体を洗い、服を洗い、髪を切り、日の丸書類も焼き、手榴弾を捨てた。

軍使を連絡に出し、九月十日武装解除と決まった。全員東方に向い残された戦友の無事を念じ、亡くなった多くの戦友に深い祈りを捧げ、密林を出て米軍の哨所に向かった。

マナゴックの収容所に入ると、すぐ山に残った者の救出に米兵と元気な兵が山に向かった。残った者全員が餓死していたとか。暗然たる思いに打たれた。二百二十人で山に入ったのが、五カ月の間に四十四人の餓死者と三十一人の行方不明者および死亡確実者の計七十五人を出してしまったのである。この行軍を発案し指揮した司令官は、山の中で命を落したという噂である。